

## 研究論文

## 九州におけるアクセント変化の再建

—境界特徴に着目して—

児 玉 望 \*

## Reconstruction of Accentual Innovations in Kyushu

—Focusing on Edge Features—

Nozomi KODAMA\*

**SUMMARY:** The author argues that the loss of Proto-Japanese right edge tone, a possible source of the pitch accent HL, left the lexical tone systems in Kyushu with only non-falling tones: H+ (high level), L+{ (low level with the right edge rise), L+H (slow rising), and LH+ (fast rising). The present-day tonal variants in Kyushu are explained as outcomes of the combinations of four major innovations, of which two are mutually exclusive: (1) the merging of L+{, L+H and LH+, (2) the shifting of H+ to LH+ or L+{(H+)} with the phonemicization of the previously phonetic falling edge tone, }, (3) the raising of L+ in L+{ and L+H, which gave rise to the pitch accent H]H, and (4) LH+ taking on word-initial accentuation.

キーワード：二型アクセント，一型アクセント，外輪アクセント，語声調，境界特徴

## 1. 概要

九州西南部の二型アクセント方言のうち、鹿児島方言を含む南九州の諸方言について、児玉望(2012)は、ピッチが卓立する位置(アクセント核)の指定のあるアクセント体系(以下、本稿ではピッチ・アクセントと呼ぶ)ではなく、境界特徴をもつ語声調という同一の類型であるとした上で、これらの諸方言の系統分化について、「アクセント核の位置の移動」により説明する従来の説に対する代案を提出した。しかし、これらの体系がピッチ・アクセントでないとすれば、さらに、これらの方言がアクセント核を失ったと見るべきか、あるいは獲得しなかったとみるべきかというさらに大きな問題があることになる。後者であれば、これらの諸方言と近隣のピッチ・アクセントを含む諸方言との間の系統関係を全面的に見直さなければならないし、「アクセント核の位置の移

動」に代わる新たなアクセント変化の説明が必要になる。

そこで、これらの諸方言に特徴的な「境界特徴」に着目して近隣諸方言と比較することにより、アクセント変化を再建することを試みる。児玉(2012)でいう境界特徴は、音韻句の内部での音韻語(ピッチ・アクセントや語声調の実現単位で南九州ではほぼ文節に相当)の境界に現れる、H「高」やL「低」といった調値に還元できないピッチ変化である。たとえば、鹿児島方言では、二つの型(A型とB型)のいずれの型でも、音韻語の終端部から次の音韻語冒頭音節に向けてピッチの下降がある。("[": 上昇, "]": 下降, "J": 先行音節内部の下降)

- (1) a. カゴシ[マ]ノ]]ラー]メン  
L.L.L.H.L#H.L  
「鹿児島(A)のラーメン(A)」

\* 熊本大学文学部教授 (Professor, Faculty of Letters, Kumamoto University)

- b. トーキョー[ノ]ラー]メン  
L.L.H#H.L  
「東京 (B) のラーメン (A)」
- (2) a. カゴシ[マ]ノ]]ラー (I) メン]ヤ  
L.L.L.H.L#L.H.L  
「鹿児島 (A) のラーメン屋 (A)」
- b. トーキョー[ノ]ラー (I) メン]ヤ  
L.L.H#L.H.L  
「東京 (B) のラーメン屋 (A)」

(1) と (2) は、限定修飾構造では1音韻句として発音され、(2) では“(I)”で表記した二つ目のHへの上昇が抑制されるが、(1)の文節頭のH「ラー」は、(2)の文節頭のL「ラー」とほぼ同じピッチとなり、先行のHより低いが先行文節冒頭のLよりは高くなる。つまり、音韻句の内部では、先行文節終端近傍のピークから次文節冒頭音節へのピッチ下降が次文節頭音節の調値に関わらずほぼ同じ幅となり、A型の先行文節では次末音節からの緩やかな下降により、B型では末音節からの急な下降により、実現しているとみることができる。

鹿児島方言ではこの境界特徴の2種類の下降、末音節1音節にわたる下降と末音節平調に続く下降とが、型の弁別を実現しており、後者のB型の境界特徴は「花」買った」のような連続の東京アクセントの語末核による下降と似て見える。しかし、屋久島や種子島の方言のように語頭部のピッチ変化が型の弁別に関わる体系では、音韻語末でこの2種類の下降が自由変異的に現れることが多い。南九州諸方言の中では鹿児島方言B型のような位置の固定した実現はむしろ例外的であり、鹿児島方言でもA型のほうは下降開始位置が揺れる場合がある。また、種子島方言のようにB型で次音韻語冒頭の上昇という境界特徴(例: [シン]パイ[ジャラッ]タロー]]ヨ「心配で (B) あられたでしょう (B)」『全国方言資料』9-p412以下同書の引用例は巻名・ページで示す。)をもつものもある。このような、実現する位置が必ずしも固定せず、アクセント核とはみなし難い、境界

部での上昇あるいは下降のピッチ変化を境界特徴と呼ぶことにする。

しかし、九州西南部の二型アクセントがすべてこのような音韻語の境界特徴をもつわけではないことは、4節でみるように、『全国方言資料』の談話音声の観察により確かめられる。4節ではまた、九州を横断して広がる型の区別のない体系の中にも、音韻句の境界がない位置で文節の境界がピッチの下降で聞き分けられるものと聞き分けられないものがあることにも言及する。さらに、九州東北部のピッチ・アクセントとされる体系も、「平板型」の有無により二分できる。東京方言の名詞無核型は、文節内部で下降がないだけでなく、音韻句の境界がない場合には次の文節との間にも下降があってはならず(例: 東京のラーメン屋)、このような平板接続の制約が一種の境界特徴であると見ることもできる。一方、このような「平板型」をもたない方言では、助詞の後ろに境界下降を挟んだとみられる「博多の]ラーメン屋」(博多方言)も可能である。

このような九州内部での変異を、「型の統合」に「アクセント核の獲得」と「境界特徴の獲得」を合わせた3種類の変化の組み合わせとして説明することを試みる。先行研究で報告されているこれらの方言の型の弁別の実現に関する情報に、『全国方言資料』に収録された九州の主要な方言の1950年代の談話音声で聞かれる境界特徴や付属語接続形、実現の揺れに関する情報を補って、九州方言アクセントの分化過程を再建する試みである。

第2節で、ピッチ・アクセントを祖形とする系統分化の結果として九州の語声調が発生したとする通説の根拠とその問題点をまとめ、第3節では、平安アクセントからの京都方言の通時変化を単一のアクセント核の位置対立の成立過程とみる川上蓁氏の視点を借り、さらに平安アクセントに先行する九州方言が分岐した段階まで遡ることにより、境界特徴に関して分化以前の九州方言が共通に経たとみられる変化を推定する。第4節で九州の代表的なアクセント類型について分化の過程を

上述のように再建し、第5節で第4節で仮定した変化の地理的分布をまとめて、波状的な変化としての分析を加える。

本稿で使用する声調記号は断りのない限り以下のとおりである。

### (3) 境界

. : 音節境界      # : 音韻語境界

### (4) 単音節の声調

L : 低      H : 高      R : 昇      F : 降

### (5) ピッチ変化

] : 音節間下降      [ : 音節間上昇

]] : 先行音節内部の下降

### (6) 可変長の音節連続に実現するメロディー

H+ : 高平調      L+ : 低平調

LH+ : 早上がり。音節数が増えると後部の高平調が伸びる（声調拡散する）

L+H : 遅上がり。音節数が増えると前部の低平調が伸びる（声調拡散する）

### (7) 境界特徴

} : 下降境界特徴      { : 上昇境界特徴

% : 何らかの境界特徴

(6) と (7) は、本稿で、可変長の音節連続に実現しうる整数個 ( $N \geq 1$ ) の声調素性としての「語声調」の、アクセント型としての表記に用いるものであり、自立分節音韻論にいう「声調拡散」を“+”で表わすことによりメロディーのピッチ曲線弁別の表記を試みたものである。音節連続が長ければ、同じ上昇曲線でも、LH+, L+H やそのいづれでもなく上昇が連続する L-H のようなさまざまな曲線が可能であるが、音節連続が短い場合（特に LH.H や L.LH のような音節内部の曲線声調が容認されない場合）はこの型の対立は中和することが多いと予想される。本稿では、語声調の型をこのようなメロディーと境界特徴の組み合わせとして説明する。たとえば、鹿児島方言の二つの型は、メロディーが共通であるとみて、弁別される2種類の下降境界特徴に添え字を付して  $L+H\}_A$  と  $L+H\}_B$  とする。同じ表記の境界特徴でも可能

な実現の幅は方言により異なると考えるが、本稿の考察は個別方言の境界特徴の区別には及んでいない。

## 2. 九州アクセント通時論の研究史

先行研究では、「祖形」からの「型の統合」と「アクセント核の位置の移動」を典型とする改新の積み重ねとによる「系統分化」の仮説によって九州のアクセント分布が説明されてきた。2音節名詞アクセントの類別（Ⅱ-1～5類と表記する）の型の統合に基づき、かつ九州各地のアクセントが単一の祖形から分化したとする説としてもっとも早いのが金田一春彦（1999, 初出は1954）である。九州西南部の二型アクセントを「西国式」に近いとして東北部の東京式に対置する考え方を否定するこの仮説では、

(A) Ⅱ-1・2類, Ⅱ-3類, Ⅱ-4・5類に型が統合したアクセントを祖形に立てる

(B) この祖形の実現形として現在この型に統合している豊前式と同じものを立て、豊前式以外の九州各地のアクセントをそれから系統分化したものとして説明する

という形をとっており、この点に関しては、その後の奥村三雄（1999, 初出1978）、奥村（1989）、添田建治郎（1996）とも共通する考え方である。

(A) は、「型の統合」に関するものであり、Ⅱ-1・2類, Ⅱ-3類, Ⅱ-4・5類のままである豊前式のほか、九州に分布するⅡ-1・2・3類対Ⅱ-4・5類（筑前・壱岐主流式）、Ⅱ-1・2・4・5類対Ⅱ-3類（対馬主流式）、Ⅱ-1・2類対Ⅱ-3・4・5類（二型アクセント）、Ⅱ-1・2・3・4・5類（一型アクセント・無アクセント）といった語彙対応の違いを、すべて型の統合を生じる改新の結果として説明し、系統分化の骨格を構成する。

(B) は、(A) の主要分岐とその枝を構成する体系をアクセント核の位置変化として説明するための原点を、ピッチ・アクセントである現在の豊

前式におくものである。この仮説では、九州祖語形とみなされる豊前式が変化しなかったのに対し、方言によっては同じ期間に5回以上の改新を経ていることになるが、金田一(1999)がこのような系統分化を想定した根拠としては、次の2点が読み取れる。

根拠Ⅰ 豊前式Ⅱ-1・2類の平板型からの「全低」化を仮定すれば、筑前式など有核の対応形や二型アクセントA型のような下降のある形をアクセント変化の結果として説明できる。

根拠Ⅱ Ⅱ-3・4・5類に対応する二型アクセントB型実現形が、助詞接続時に助詞への「山の移動」がある点で京阪式アクセント(低起無核型Ⅱ-4類)に対応するようにみえるが、これらの形は文節末に「アクセントの滝」と呼ぶ下降を持つ点で京阪式アクセントと異なり、またB型実現形で助詞への「山の移動」のない二型アクセントもあることから、「山の移動」のある二型アクセントも「山の移動」のない豊前式からの改新の結果として説明すべきである。

根拠Ⅰは、無核からアクセント核が発生する変化として、京都のアクセントからの通時変化で実証される一連の変化を仮定するものであるが、批判も多い<sup>1)</sup>。奥村三雄(1999)は、筑前・壱岐・対馬の祖形として、全低化に次いで、直接語末音節に核が生じる変化を仮定している。根拠Ⅱで助詞への「山の移動」がないとされた屋久島宮之浦方言の、助詞が低接するB型2音節名詞の実現形は、児玉(2012)が、助詞の有無とは無関係に3音節文節で文節次末音節から下降する下降境界特徴の実現例であり、同様に文節末に下降境界特徴をもつ他の屋久島諸方言のB型と比べて保守的と考える理由はないとした。

金田一説の(A)と(B)から離れたアクセントの通時変化の説明としては、木部暢子(2010)があり、早田輝洋(1999)の音調類型論を援用して、鹿児島方言の語声調を、名義抄式体系が併せ持っていたトーン的性質とピッチ・アクセント的

性質のうち、トーン的性質のみを残した体系として説明する。ピッチ・アクセント体系から直接語声調が発生したとみることになる(B)を取らない点、平安時代よりかなり早く日本語の地理的拡散と方言分化が開始されていたであろうことを考慮すると必ずしも想定する必要はないとみられる系統分化上の中間段階(A)に言及しない点で、示唆的な説である。しかし、(A)の段階がピッチ・アクセントではないもののピッチ・アクセントが生じうる体系であったとすれば、語声調体系とピッチ・アクセント体系の共通の祖形として(A)を想定することも可能はずである。また、この(A)が名義抄式体系の成立以前に分化していた可能性も検討されねばならない。これらの観点から、(A)のみを採って九州方言の分化過程の全面的な見直しを試みる。まず名義抄式体系を検討し(B)説に代わる九州方言祖形がどんな特徴をもっていたかを考える。

### 3. 九州アクセント共通の変化

奥村(1999)は、名義抄式体系から九州アクセントの祖形としての豊前式への変化と仮定されるⅡ-1類とⅡ-2類、Ⅱ-4類とⅡ-5類の統合を、「有核型の回避傾向」「無核型化」と呼んでいる。これは、三音節語の類でも並行的にⅢ-1類とⅢ-2類、Ⅲ-6類とⅢ-7類がそれぞれ統合していることと合わせ、先行する段階として仮定する院政期の名義抄式体系のⅡ-2、Ⅱ-5、Ⅲ-2、Ⅲ-7の各類に「アクセント核」があったことを前提としている用語である。

これに対し、川上蓁(1997)は、下降契機と上昇契機という2種類の位置の対立から成る平安アクセント(川上氏の名義抄式を指す用語であるが、氏の引用以外の部分でもこの語を使用する)の体系から、1種類の「核」の位置が対立する現在のピッチ・アクセント体系<sup>2)</sup>が成立する過程を、質的な変化を伴うものとして詳述する。さらに川上(2000)では、平安アクセントの上昇・下降の位置による対立を、「核」ではなく「上昇時機」「下

## 九州におけるアクセント変化の再建

降時機」という用語で記述し、高起性・低起性と上昇時機・下降時機の有無の組み合わせにより、「高」「降」「低」「昇」「凸」の5種類のトーンを定義する。これらの川上論文の京都でのピッチ・アクセントの成立に関する考え方は、(8)のようにまとめられる。

## (8) 川上説による京都方言のピッチ・アクセントの成立

- a. 下降時機は、そのままの位置に下降を生じるアクセント核となる。
- b. 上昇時機は、川上(1965a)の変化を経て、1音節前に下降を生じるアクセント核となる。後続の上昇時機・下降時機はすべて失われる。
- c. 語頭音節後のみに残存した上昇時機は、位置による対立を失い「向き」(昇・不昇)の弁別となる。

先に述べたように、「下降時機」は位置の弁別であるが、川上(1997)の表1にまとめられた、平安アクセントの名詞に可能な実現型には、面白い特徴がある。「体系的には存在しうる型」とされる語例のない型、「H XXX], H XX], L X[XX], L [XXX], L [XX]]」<sup>3)</sup>はすべて語末に下降時機(“”)をもつものである。語末の下降時機で語例があるのは、「H 名], L [菌], L あ[め], L あき[づ]」のように、次末音節後に下降時機をもつことができないものに限定されているので、上昇時機の有無と位置が同じであれば、下降時機が次末音節か末音節かは相補分布を成しているといえる。1節で述べた南九州の二型アクセントの下降境界特徴の自由変異と似ている。

さらに、下降時機の後にLが音節を越えて連続するⅢ-3類(「H ち]から」)や孤立例の「H ]ひむか, H ]にじ, L [え]やみ」が、他方言とのアクセントの対応をもたず、したがって京都方言独自の改新であると考えれば、これに先行する段階では下降時機には位置の対立がなく、下降時機がない型とのみ対立していた、ということになる。こ

の見方では、九州諸方言のアクセントの「有核型の回避傾向」とは、下降時機の有無による対立の喪失であり、この結果(9)の下線部と二重下線部の上下の対の弁別が失われた。

(9) 平安アクセントの名詞の主要な類別と「トーン」(川上2000に拠る<sup>4)</sup>)

名詞の類別	I	II	III	川上氏のトーン
I II Ⅲ-1 類	H	H.H	H.H.H	高
I II Ⅲ-2 類	F	H.L	H.H.L	降
I II-3 類, Ⅲ-4 類	L	L.L	L.L.L	低 <sup>5)</sup>
Ⅲ-5 類			L.L.H	昇
(I) II-4 類, Ⅲ-6 類 (R)		L.H	L.H.H	昇
(I) II-5 類, Ⅲ-7 類 (R)]		L.H]	L.H.L	凸

下降時機の有無による弁別の喪失は、程度の違いはあるものの、京阪式アクセント以外のすべてのアクセントで観察される。東京式アクセント類型の下位区分に京都との位置関係に基づく地理的な名称を付した「外輪式」「中輪式」「内輪式」は、この弁別の残存による分類であるとみることもできる。東日本の外輪式アクセントでは、九州と同様に、この弁別をすべて失っている。それ以外の方言でも、語末の下降時機による弁別が失われている。語末の下降時機の有無による対立は、名詞の類別では高起で1音節以下、低起で2音節以下の語に限られるが、次のようなものがある。

## (10) 平安アクセントの語末下降時機の有無による弁別

- a. I-1 類 H と I-2 類 F
- b. 上野(2006)の I-4 類 R「巢」と I-5 類 R「菌」

京都では鎌倉期以降に高起化する。豊前式、二型では共に I-3 類と統合した。

- c. II-4 類 L.H と II-5 類 L.H]

高起助詞が H (上声) で現れる平安期の声点資料では表記上の区別がない。川上(1965b)は II-5 類に、表記されなかった区別として「音調の谷」を仮定した。

東京方言を含む中輪式の諸方言では (10) a と (10) c, 名古屋方言など内輪式の諸方言では (10) c の弁別が失われた。このように, 京阪式アクセント地域を除く全国の広い範囲で平安アクセントの下降時機の有無に対応する型の弁別を失う変化が起きたのに対し, 京阪式アクセント地域ではこの変化が起きなかったことになるが, あるいは逆に, 京阪式アクセント地域を中心に, この変化を妨げるような改新があり, 内輪式・中輪式へと波状的に広がり外輪式と九州には及ばなかった, という解釈も不可能ではない。たとえば, (8) のピッチ・アクセント化が京阪式アクセント地域を中心に進んだ改新であり, それに先立つ段階ではピッチ・アクセントではなかった, と考えることもできる。

平安アクセント語末近傍の下降をすべて, これに先立つ段階 (原平安アクセント) では, 位置の対立のない何らかの境界特徴の実現であったとみなしてこれを % で表記し, (8) の発生する前の段階の上昇時機のみによる対立を語声調のメロディーの実現と解釈すると, (11) のようにみることができる。

(11) 原平安アクセント形の語声調としての音韻解釈 (名詞)

語声調	I	II	III	名詞の類別
H+ 類	H	H.H	H.H.H	I II III-1 類
H+% 類	H%	H.H%	H.H.H%	I II III-2 類
L+ 類	L	L.L	L.L.L	I II-3 類, III-4 類
L+H 類			L.L.H	III-5 類
LH+ 類	R	L.H	L.H.H	(I) II-4 類, III-6 類
LH+% 類	R%	L.H%	L.H.H%	(I) II-5 類, III-7 類

さらに, (8) a でピッチ・アクセントが成立する過程を, これらの境界特徴の下降位置の固定を促す次のような, 環境に応じた 2 段階の変化であると考える。

(12) 境界特徴 % のアクセント核化

- i H.H% が次末核をもつ H].L となる。
- ii 残った H% が語末核をもつ H] となり, 実現形として F をもつ。

(12) が完了した平安アクセントでは, 下降が位置を固定し, さらにその位置による対立も加えてアクセント的性格を強めた「下降時機」になり, 境界特徴 % はなくなったとみる。この後に境界特徴 % が脱落する変化が起きたとしても, 平安アクセントは影響されない。内輪式・中輪式での平安アクセントと共通する型の弁別の維持は, (12) の部分的な完了によって説明できる。(12) i のみが起きた中輪式方言では, 無核の II III-1 類, III-6 類と有核になった II III-2 類, III-7 類との弁別を保ち, 内輪式方言では (12) i に加え, 1 音節語でのみ (12) ii が起きたため, (10) a の弁別を保った, と考えるのである。九州と外輪式方言では (12) を経ておらず, この段階では下降時機の位置による弁別が発生しないまま, やがて下降時機の有無による弁別を失ったことになる。(12) の位置の固定したアクセント核の発生を改新とみなし, この変化の外縁にアクセント核のない語声調が残ったとする方言地理学的な説明である。

(12) は, 名詞語形の長さを条件とする変化であるが, 屋名池誠 (2004) が記述した動詞と形容詞の活用形の平安アクセント形のうち, 動詞では, 連体形以外で語末において同様の, 動詞語形の長さに応じた H.L# と F# の交替がある。屋名池 (2004) にいう「-系列」(高起に対応・H+ 類) が (12) に従うのに対し, 「+系列」(低起に対応・L+H 類) の動詞については, この交替が L.L の連低トーンを保持できるかどうかで場合分けされているようにみえる<sup>9)</sup>。

(12)' L+H 類動詞の境界特徴 % のアクセント核化

- i' L.L.L.H% が次末核をもつ L.L.H].L となる。

高起・低起とも長さに関わらず連体形が H で終

## 九州におけるアクセント変化の再建

わり下降時機を欠くことと考え合わせると、動詞活用形末尾のLやFが原平安アクセントの境界特徴%に遡るとすれば、境界特徴%の有無は動詞では語の弁別ではなく活用形の弁別に参与していたことになる。二型の弁別は、動詞・形容詞ともH+とL+Hのメロディーの対立に還元できる。

アクセント核に変化しなかった境界特徴%の脱落は、ピッチ・アクセント化の進展の度合いに関わらず全国に及んだ変化であったとみなければならない。境界特徴%の実現が語末付近でのピッチ下降（「音調の谷」）であったとすれば、境界特徴の有無による弁別は、境界の後に高起の語が接続する場合にのみ発現する特徴であった可能性が高い。京都では鎌倉時代には始まっていたとされる、高起付属語の「順接化＝高起性の喪失」は、その弁別が実現する機会を大きく狭めたことになる。「高起性の喪失」がこれらの付属語のアクセント上の独立性の喪失を意味するとすれば、境界もまた失われたはずだからである。実現機会の少ない弁別を維持することは、全国のどの方言でも困難であったとみられる。

## 4. 九州アクセントの分化

九州諸方言のアクセントでは、境界特徴%の有無による弁別の痕跡が知られていない。従って、九州アクセントの祖形では%を考慮する必要はなく、脱落したものとして2節の(A)に相当する(13)のような祖形をたてる。L+{類の上昇境界特徴については後述する。平安アクセントの下降時機の位置による型の区別は獲得しなかったものの、上昇時機の位置による区別はあるので、(8)bのような変化によってピッチ・アクセントが発生する可能性は残していただろう。一音節語のL{とRの二型はすでに統合していた可能性があるが、どちらの型に統合したかを判断する材料はない。

## (13) 境界特徴%による弁別の喪失後の九州アクセント祖形

語声調	I	II	III	名詞の類別
H+ 類	H	H.H	H.H.H	I II III-1・2 類
L+{ 類	(L{)	L.L{	L.L.L{	(I-3 類), II-3 類, III-4 類
L+H 類			L.L.H	III-5 類
LH+ 類	(R)	L.H	L.H.H	(I-4・5 類), II-4・5 類, III-6・7 類

境界特徴による弁別を欠く体系では、境界でおきるピッチ変化は、境界前後の音節の調値が同じかどうかだけに応じて決定されることになる。現代京阪式アクセントはこの状態に近く、音韻句内部では無核(H#)の語に低起(#L)の語が連続する場合の境界でのみピッチ下降、有核語や低起無核の語(L#)と高起(#H)の語の連続でのみピッチ上昇が起きる。下降時機を欠く九州の諸方言では、語末が高くなるH+, L+H, LH+の各類のあとで、接続する語が高起か低起かのみによる同様な条件付けがあったはずである。

## (14) H#に後続するピッチ変化

- ・低起各類(L+{, L+H, LH+)が接続するとき下降
- ・高起類(H+)が接続するとき平進

(14)に従わない唯一の型がL+{である。川上(1997)は、京都アクセントで低トーンに接続する付属語が、高起付属語の「順接化」に従わず、高起性を維持したことを根拠に、この段階で低トーン型の語末に上昇契機が生じたと論じている。(13)でL+{としたのは、九州でも同様にこの語類への付属語の高接が維持されたという仮定に基づく。この場合、L+{類の語が低起以外の助詞を伴う文節は、L+Hの音形となり、やはり(14)に従ったと考えられる。

(13)の「九州祖形」からの変化で、語頭の高起・低起の対立を失うとき、高起側に統一すれば、文節境界ではつねに平進接続となり、低起側に統一

すれば、文節間につねに境界下降が生じることになる。『全国方言資料』に収録された九州諸方言の談話資料に観察される境界特徴の違いは、このような(13)からの変化の結果として説明できる可能性がある。この観点から「アクセント核の獲得」と「境界特徴の獲得」がどのように起きたかを、九州諸方言の「型の統合」による分類に従って検討していく。

#### 4.1 豊前式ピッチ・アクセント

高起側に統一したと説明できそうな方言が豊前式である。この方言は、型所属の違いを無視すれば、平板型をもつピッチ・アクセントという東京方言に似た体系である。(13)を起点としてこの方言のピッチ・アクセント化を考える際には、東京方言が経たと考えられている過程を参照し、これから(8)aを除いた(15)を仮定することができる。

##### (15) 豊前式のピッチ・アクセント化

- a. 上昇時機は、川上(1965a)の変化を経て、一音節前に下降を生じるアクセントとなる。後続の上昇時機はすべて失われる。  
=(8)b
- b. アクセントの位置が1音節後ろにずれる。
- c. 語頭音節後のみに残存した上昇時機は、語頭隆起により生じた語頭アクセントにより失われる。

(15)cは、東京方言などではⅢ-6類(「兎」類)に適用されず、この類が無核のままⅢ-1類(「形」類)と合流して平板型となるが、豊前式方言ではⅠ-3・4・5類、Ⅱ-4・5類、Ⅲ-6・7類が規則的に語頭音節にアクセント核をもつ。(13)のL+{類とL+H類は(15)aにより、LH+類は(15)cにより下降アクセント核を獲得しピッチ・アクセントとなり、アクセントに先立つ部分はピッチが高くなるため、低起の型はなくなり、文節境界では常に平板接続になることが予想される。

『全国方言資料』には、豊前式の談話資料とし

て築上郡岩屋村鳥井畑(現豊前市)、大分郡西庄内村(現由布市)、南海部郡上野村(現佐伯市)の3地点のものが収録されているが、これらの方言では、予想通り東京方言と似た平板型が聞かれる。ただし、西庄内村と上野村では、付属語として低起を保ったとみられる引用の助詞や指定助動詞の前では、無核の語のあとでも境界下降がある。

3方言の談話資料には、(8)aを経ていないことに結び付けられる大きな特徴がもうひとつある。京阪式および中輪式・内輪式では、(8)b=(15)aの結果、L.Lをもつ類が(8)aで有核になっていた型(Ⅱ-2類、Ⅲ-2類、Ⅲ-3類)と統合して、アクセント核の後がLに変わったはずである。これに対し、(8)aを経ていない豊前式ではL+{類とL+H類が統合すべき有核型がなかったことになる。新たに発生したアクセント核に続く音節は語末までピッチが低くなったが、後続の語との境界に関してはHの特徴を維持し、後続の語との間で平進のままだったとみられる。3方言の談話資料は、無核型だけでなく、語末核以外の有核型の後でも一貫して平進し、核以外の位置での下降が極めて少ない、という特徴を共有している(例：岩屋村 サル[シノオ]ビオリーコーチクレーチャー「さらしの帯をおれに買ってきて6-p94」上野村 [ヨー]カンナアリマ]スワ[ナー「ようかんがありますねえ6-p343」西庄内村 ワ[ケ]ーモンノユーコ]トモ「若い者の言うことも6-p317」)。東京方言と同様、音韻句冒頭のみに発現する「句音調」とみられる語頭のLには方言差があると考えられるが、共通して、長音節でも音節全体が低平調の発話が聞かれる。また、長音節に核がある場合でも、下降開始が音節末に近く高平調に聞こえる発話が目立つ。

#### 4.2 筑前・壱岐・対馬での下降境界特徴の発生

筑前・壱岐・対馬の諸方言には平板型とみられる型がなく、奥村(1999)は、これらの方言に共通の祖形においてⅡ-1・2類に語末核が出現した再建形を提案している。この「語末核」が、アクセ

## 九州におけるアクセント変化の再建

ントではなく、(14)の下降が、すべての語が低起化することにより調値から独立して成立した下降境界特徴である、という可能性を検討する。これらの方言は、型の統合ではⅡ-1・2・3類対Ⅱ-4・5類（筑前・壱岐主流式）とⅡ-1・2・4・5類対Ⅱ-3類（対馬主流式）の2タイプに分類され、これらが壱岐と対馬の両方で並存する分布となっているが、平板型の欠如のほかにも以下のような共通点がある。

## (16) 筑前・壱岐・対馬の諸方言の特徴

- a. 1音節名詞に型の区別がない。
- b. 動詞と形容詞に型の区別がない。
- c. 第2音節以降の母音の広狭を条件とする型の分割が起きた方言が多い。

(16) bは、原平安アクセント動詞と形容詞の語声調祖形H+とL+Hの対立の喪失である。(16) cの中には、末母音の広狭を条件としてⅡ-1・2・3類対Ⅱ-4・5類への統合とⅡ-1・2・4・5類対Ⅱ-3類への統合に分かれる方言（博多方言、壱岐武生水方言）もあり、この地域に共通してまずⅡ-1・2類を含むH+類の変化があり、これが(16) cにつながったと考えてよいと思われる。

(13)のH+類（Ⅱ-1・2, Ⅲ-1・2各類）がL+{類（Ⅱ-3, Ⅲ-4各類）と統合したのが筑前式や壱岐主流式の方言である。この統合の経路としては、二つの平進の型が高低の別を失い合流したと考えるのがもっとも単純である。しかし、この地域の方言の中には、第2音節の母音の広狭を条件とするアクセント変化がⅡ-1・2類のみで報告されているものが多い。また、2・3音節語についての型の帰属に関する早田輝洋・陣内正敬（1999, 初出1984）の博多方言に関する報告の老年層に関するデータでは、H+各類とL+{各類の間で、規則形と予想される無核類になる比率に大きな差がある。これらの類による振る舞いの違いは、H+類とL+{類の弁別が一定期間維持されていた、と考えなければ説明がつかない。

早田・陣内（1999）の博多方言老年層データ<sup>7)</sup>では、LH+類（Ⅱ-4・5類, Ⅲ-6・7類）とL+H類

（Ⅲ-5類）で有核になる比率がもっとも高く、L+{類がほぼ規則的に無核（語末に境界下降があり助詞が低接しうる型）となるのに対し、H+類は有核となるものと無核のものに二分される。H+類が有核となる比率は2音節語より3音節語が高く、過半数に達する。LH+類は、Ⅲ-6類（「兎」類）を含め語頭核の比率が他の類より高く、豊前式（15）cと同じ変化が筑前式でも起きてピッチ・アクセントを獲得した可能性を示唆するのに対し、（15）a-bに相当する変化でピッチ・アクセントが発生したという積極的な証拠はない。

そこで、LH+類・一部のH+類のピッチ・アクセントの獲得と、ピッチ・アクセントを獲得しなかったH+類とL+{類の統合の2つの段階に分けて、博多方言を例として筑前式アクセントの変化を再建する。

## (17) 博多方言（筑前式）のピッチ・アクセント化

- a. H+類, LH+類, L+H類が調値に関わらない下降境界特徴を獲得しL+}, LH+}, L+H}となり、高起と低起の区別を失う。
- b. LH+}が、語頭隆起により語頭アクセント核を獲得する。=(15) c
- c. 1音節語のL}と有核H], 狭い母音に終わるL.L}と語頭アクセント核をもつH]. Lの弁別が失われる。

(17)aの結果、メロディーとしてのH+とL+は、先行文節の下降境界特徴に続く位置で調値の弁別が維持できなくなると考えられるが、L+}とL+{のような、境界特徴により型の区別は維持される段階である。(17) cで1音節名詞の型の区別の喪失と、狭母音に終わる2音節名詞の語頭核型への合流を説明する。博多方言に関しては、1音節語では無核のL}へ、狭母音に終わる2音節語では語頭核化の方向で統合が進んだとみられる。後者は、境界特徴による下降が次末音節末から開始されやすい環境で、この位置の下降が固定して次末核となる、という、(12) iを思わせるアクセントの発生の例である。早田・陣内（1999）で

H+ 類の3音節語の有核化率が高いのも、母音の広さとは関係なく、長い語で境界下降が早まりやすいという傾向を反映する可能性があるが、この論文データは数値のみで語例がなく詳細はわからない。いずれにしても、2音節語であれ3音節語であれL+{ 類で語末の母音に関わらずこの有核化が起きにくいことは、下降境界特徴に由来するアクセント核がピッチ・アクセントの成立に関わっていることを示している。

(18) 博多方言（筑前式）のアクセントにおける  
H+ 類由来のL+{ とL+{ 類の統合

- a. 文節末に境界特徴をもつL+{ とL+#H}の弁別が失われてL+{ に統合する。
- b. 語末の境界特徴でも型の区別がなくなり、下降境界特徴をもつL+{ に統合する。

早田輝洋（1982）が博多方言で助詞が低接しうる名詞の型（例：ソロバン]カラ「算盤を」, ソロバンバ「算盤を」）を語末核型ではなく無核とするのは、これらの型で助詞に平進する音形（例：ソロバンダ]ケ）が現れるからであるが、このような音形は、語末ではなく文節末に境界特徴が現れている音形とみなすことができる。『全国方言資料』の博多方言の談話でも、二音節の助詞で種類に関わらず下降境界特徴が語末に出るか文節末に出るかによるとみられる揺れが頻出する。(18)aの文節としてのL+{ とL+H}の弁別の喪失は、動詞・形容詞の型の喪失と平行的にみえる。(18)bについては、文節末の下降境界特徴が(H.)Lの音形をとる場合、語末下降境界特徴による1音節助詞への下降(H#).Lとも解釈できる、というような音形の重なりも弁別の維持を困難にした要因とみることができる。L+{ 類に有核語が少ないことから、(18)以降は(17)cで説明したような境界特徴のアクセント核化が起きなくなるとみななければならない。これは、アクセント核の位置対立が確立した後、境界特徴の実現の変異の幅が狭まったことによると考える。

一方、対馬には、西南部の一部の集落を除き、

II-1・2 類(H+) がII-4・5 類(LH+) と統合して1音節助詞接続の文節形でH.L#.Lとなり、II-3 類(L+{) のL.H#.Lと対立すると報告される対馬主流方言が広がる。この方言では、1音節語のほか、語末母音が狭い2音節語が型の区別を失いII-3 類も含めH.L#.Lとなることが知られる。3音節語については報告がないが、『全国方言資料』の収録地点でもある旧上県郡上対馬町鰐浦での筆者の調査では、3音節語についてもIII-4 類(L+{) の語(頭, 男, 袋, 表, 光, 嵐, 林)について語単独の発話で語末音節が広い場合にL.L.H, 狭い場合にL.H.Lのような対応がありそうなのがわかった。ただし、この方言では、型の区別が明瞭な2音節の語も含め、Hの位置が様々な条件(話者, 文節環境, 音節構造)で揺れる。本稿の仮説に従えば、アクセント核の位置が固定したピッチ・アクセントの獲得につながるような(15)の変化がいずれも起きていないのではないかと疑われる体系である。

2音節語の型の統合を(13)から導くもっとも単純な仮説は、(19)のようなものである。

(19) 対馬鰐浦アクセントにおける(13)の型の統合

- a. H+ 類が低起化してLH+ 類と合流する。  
すべての型が低起となったため下降境界特徴が生じLH+ 類, L+H 類がLH+{, L+H}に, L+{ 類の文節形はL+H}になる。
- b. L+{ 類は、語単独の形でL+Hに変化する。

(19)は、II-1・2 類とII-4・5 類の統合により生じた類のH.L(例:ア]メ「雨」)をLH+{と予測し、一見矛盾するが、現地調査では文節形でH.L#.L(例:ア]メノ「雨の」)のほかにL.H#.L(例:ア[メ]ノ「雨の」)でも現れていること<sup>9)</sup>を考慮すると、LH+{の境界特徴の下降開始がこの方言では2音節語単独形でも早くて次末音節末に開始している、という解釈が可能である。この方言でも博多方言と同様、下降境界特徴が付属語の前で現れるか文節末に現れるかの揺れが観察される(例:

## 九州におけるアクセント変化の再建

オ[ナ]ゴワ～オ[ナゴワ「女は 9-p152, p154」]ので、「雨の」は H.L#L が語末, L.H#L が文節末にそれぞれ境界特徴の出る形である, とみることもできる。オト[コ]モ「男も 9-p167」～オトコ[カ]リヤー「夫に 9-p154」のような L+{ 類由来の名詞の文節形や, 型の区別を失った動詞形など, L+H} と解釈可能な語形での次末音節の卓立も, 境界特徴の下降の開始が早いことの傍証となる。

1 音節名詞は型の区別を失うが, (19) は, 1 音節名詞の文節での実現形 LH} (例: メ[カ]ラ「目から」) を, LH+} 類と L+H} 類の対立の短い文節での中和として説明し, 単独形での区別の喪失もそれに結び付けることになる。しかし, 語末母音が狭い名詞の単独形で, 境界特徴をもつ形に型が統合することは (19) だけでは説明できない。また, 動詞・形容詞の型の対立の喪失を説明するためには, H+ 型に由来する LH+} 類と L+H 型に由来する L+H} 類との統合を (19) に追加することになるが, 動詞・形容詞の統合形は L+H} となっており, 動詞・形容詞の LH+} 類が名詞とは異なる変化をしたと考えねばならない。ただし, 名詞でも, 文節形では, 上述のように LH+} 類と L+H} 類との対立が中和しているとみられる音形も出現する。また, 連文節の前分ではいずれの型も L+{ のような語中の上昇を欠く音形が談話の中で頻繁に聞かれた。

一方, 2 音節の H.L を (15) c による語頭アクセント核の発生として説明するには, 3 音節語の調査で筆者が確認できた頭高語がすべて狭母音を含むものである, という点が弱い。文節形がしばしば下降を欠くことは, (17) c のような下降境界特徴のアクセント核化を否定する。アクセント核獲得の可能性があるとすれば複合語である。名詞複合語形成で卓越しているのは, 前分が L+{ で後分の冒頭に H がある語形である。ただし, 後分の H に続く下降も消える場合があり, これをアクセント核とみてよいかどうかはさらに調査が必要である。

(20) (13) からの九州東北部のアクセント変化のまとめ

(13)	豊前式	博多 (筑前式)	鰐浦 (対馬主流式)
H+ 類	H+	L+}, 一部次末核	LH+}, 文節 L+H}
L+{ 類	語末核	L+}	L+H, 文節 L+H}
L+H 類	語中核	L+}, 一部次末核	L+H}
LH+ 類	語頭核	語頭核	LH+}, 文節 L+H}

(20) に, (13) の語声調各類のピッチ・アクセント化を中心に, 4.1. と 4.2 の小節で検討した九州東北部の 3 方言の対応をまとめる。H+ 類の低起化と境界特徴の獲得は筑前・壱岐・対馬に共通の変化であるが, LH+ 類の語頭核獲得は豊前式と筑前式・壱岐主流式にのみ共通の改新であるとみる。系統分化とみるよりは波状的な変化の結果として説明するのがふさわしい三者関係である。対馬鰐浦方言は, ピッチ・アクセントを獲得していないとすれば 2 型をもつ語声調となるが, 次小節で述べる九州西南部の二型アクセントの語声調とはかなり異なる類型であるとみなければならない。

#### 4.3 二型アクセントと一型化

低起式のすべての類, つまり, L+{ 類 (Ⅱ-3, Ⅲ-4 各類), L+H 類 (Ⅲ-5 類), LH+ 類 (Ⅱ-4・5, Ⅲ-6・7 各類), I-3・4・5 類が区別を失って H+ 類 (I-1・2, Ⅱ-1・2, Ⅲ-1・2 各類) と対立するのが二型アクセント体系である。類の統合のほか, 次のような共通の特徴がある。

##### (21) 二型アクセントの特徴

- 1 音節名詞に二型の区別がある方言が多い。
- 動詞と形容詞に二型の区別がある。

児玉 (2012) が再建する種子島・屋久島・鹿児島共通祖語も, 2 種類の上昇調メロディーと境界

特徴をもつ体系であって、H+ 類の低起化と下降境界特徴の相関を示す例となっている。この方言の場合は、本来は低起であった付属語も一部を除いて高起化して付属語の多くが音韻語としての独立性を失い、語ではなく文節のみが境界を表示する文節語声調ともいうべき体系になったと考えられる。

(22) (13) と児玉 (2012) の種子島・屋久島・鹿児島共通祖語の対応

H+ 類	LH+}	A 型
L+{, L+H, LH+ 各類	L+H} ~ L+{	B 型

この祖語から派生したと考えられる南九州の二型アクセント体系のほとんどが1音節名詞の型の弁別を維持している。1音節で上昇調を2種類弁別することができるとは考えにくい。この点については、児玉 (2012) ではB型祖語形として低平調で上昇境界特徴を伴うL+{を変異形として加えて説明されている。これは、さらに、屋久島のいくつかの方言の短いB型文節で上昇境界特徴が現れることや、種子島や甕島の多くの方言でB型末に「アクセントの滝」を欠き、代わりに上昇境界特徴や文節末上昇調が出ることを根拠としている。つまり、祖語形は両方の形をもち、方言ごとの独自の変化によって取捨選択が行われた、という解釈である。しかし、L+{ 類、L+H 類、LH+ 類が統合するにあたって、その実現形としてどれが選択されるかによるアクセント分化がすでに進行していた、という可能性もじゅうぶんにある。

(22) は、南九州の二型アクセントが両方の型に共に境界特徴をもつことをA型がH+ 類の低起化を経たものとして説明するものであるが、九州西部にはこの類型に含まれず、高起と低起の別を維持しているように見える二型アクセントもある。

(23) (13) の「高起」と「低起」を維持した二型アクセント (島原二型)

H+ 類	H(H)L+	A 型
L+{, L+H, LH+ 各類	L+H	B 型

『全国方言資料』に収録されている南高来郡有家町 (現南島原市) の談話資料からは、境界特徴も発生していない可能性がうかがわれる。A型文節は冒頭の1~2音節が高く下降に続き低い音節が続くが、A型の語が後続する場合には、次の文節頭まで平進で続き、境界で上昇が聞き取れるもの (例:[ガー]ッパン([I]ノボ)ルヒー)トン「かっぱが陸上りする日なんだが6-p194」) と、聞き取れないもの (例:[クダ]リヨッタトコル)ガ「下って行ったところが6-p193」) がある。一方、B型冒頭Lへも平進する (例:[テン]キモヨカ)ケン「天気もいいから6-p206」)。B型文節の後で「アクセントの滝」が聞かれるのは、後続文節がやはりB型で文節頭にLをもつ場合 (例:オージシン[ガ]ガシタ「大地震がありました6-p186」) とA型に平進するタイプのA型の語が接続する場合 (例:デ[ラル]ト)コルデ「出られるところで6-p193」) である。A型の語が接続する場合にむしろ上昇する音形 (例:スー[ヤ[イ]タトコル)ガ「酢屋に行ったところが6-p194」) も聞かれる。この分布から、この方言ではA型の語が高起性を保った語と失った語に分かれている可能性があると考ええる。また、木部暢子 (1988) の加津佐 (現南島原市) 方言の記述でも、B型(L+)はB型に接続するときのみ文節末Hと「アクセントの滝」による下降があり、A型に接続する場合には上昇すると解釈できる記述がある。有家町の談話資料には、通常はアクセント上独立しない付属語が音韻語として独立して現れている語例もあり (ドーザクマ[ジャ「堂崎までは6-p188」]に対するドー[ザク[マ]デー「堂崎まで6-p188」]) この点でも鹿児島方言と異なる。

高起と低起の対立が中和する前に九州各地で低起各型の型の弁別が失われる変化が起きたと考えるべき一つの根拠は、九州に広く分布する型の区別のないアクセントの存在である。あまり記述の進んでいない分野であるが、『全国方言資料』に収録された限られた地点数の資料だけでもかなりの地域の変異があることがわかる。この資料のみに基づく現段階での印象記述であるが、境界特徴に関しては次のように分類できる。

## 九州におけるアクセント変化の再建

## (24) 『全国方言資料』 談話音声の音韻句内部の境界特徴の観察

- a. 特定の付属語の前以外で境界特徴が聞き取れない（東臼杵郡南方村・現延岡市  
例：テ[ガミュアヅカツチェキタキ「手紙を預かってきたので 6-p430」ナ[ベオコメーヤツヒトツ「鍋を小さいのをひとつ 6-p433」]
- b. 境界特徴の出現が有標であると疑われるような卓立形に限られる（三井郡善導寺町・現久留米市<sup>9)</sup>、フシエンアタツタキモン[ドン]キトツテ]タイ「つぎのあたった着物など着ているよ 6-p65」日南市飢肥例：[ジュー]イチエンバカンノトコ[デ]タノンジョ[ク]ワ「十一円ほどのところをお願いしますよ 6-p403」]
- c. 下降境界特徴がほぼ一貫して現れその削除が有標であると疑われる（熊本市 例：フレウリ]イキ]ヨッタ]モン[ナ「触れ売りに行ったものですね 6-p255」，上益城郡浜町・現山都町，東松浦郡有浦村・現玄海町 例：トーカ]グッタ]テチ]オモ]チョル[トン「十日だったと思うけれど 6-p159」，福江市上大津・現五島市，佐賀郡久保泉村・現佐賀市)

一型化の説明としては、これらの方言が、獲得したピッチ・アクセントをまた失ったとみるよりは、ピッチ・アクセントを獲得する以前に低起各類の弁別を減らしていき、何らかの変化で最終的に一型化した、と考えるほうが無理がないと思われる。たとえば、低起各類がLH+の形で統合した方言では、H+類側でLH+化が起これば下降境界特徴をもつLH+}の形で一型化する。これに対して、H+類側でLH+化が起きない状態で統合したLH+がさらにH+との弁別を失えば、境界特徴を獲得しないままアクセントの弁別を失う。低起各類がL+{の形で統合した方言では、H+類が下降境界特徴を獲得しないままこのL+{類と統合した場合には、下降境界特徴のない一型となる。

また、アクセントの弁別性はないが、同じ語で複数の声調形が何らかの要因で使い分けられているとみられる方言（北松浦郡中野村・現平戸市，佐賀郡久保泉村・現佐賀市，南松浦郡新魚目町浦桑・現新上五島町）もある。これらの方言は、二型アクセントの型所属が曖昧化したものともみることができよう。いずれの方言でも、語頭部にピッチ下降のある型とない型が現れる。中野村方言では、ピッチ下降のある型（例：[ム]カシノワッカモンナ「昔の若い者は 6-p221」cf. ムカシャ「昔は 6-p221」）の後では境界特徴を欠き平進で次文節に接続する。浦桑方言にも似た例（[ク]ジラニヨツテ「鯨によって 9-p70」cf. ク[ジラン]「鯨が 9-p70」）がある。この種の音形は、境界ではなく内部でのピッチ下降がアクセント単位を定義する頂点型の声調形といえる。久保泉村方言ではいずれの型（[デン]キ]バ「電気を 6-p132」～デンキノ「電気が 6-p133」）も境界特徴を伴うことが多い。

二型アクセントに共通のL+{, L+H, LH+ 各類の統合は、上昇時機の違いによる弁別の喪失ということになる。これは、上昇時機の違いの弁別がアクセント核の位置による弁別に変化する可能性を封じる、という系統分化に似た不可逆的な効果をもたらす改新ではあるが、これにより「二型アクセント祖形」のような単一の語声調形に帰着したと考える必要はないと思われる。低起側の語声調形がそれぞれ異なる複数の体系が、たとえばH+類で共通の変化を起こすこともあり得たはずである。(22)の種子島・屋久島・鹿児島「祖語形」も、H+類がLH+}に変化した方言のうち、二型の弁別を維持した諸方言のもちえた語声調形の範囲を示しているに過ぎない。

## 5. アクセント分化の方言地理学

以上、九州アクセントの分化を、系統分化として中間段階の祖語を立てるのではなく、すでに地域分化をはじめていた諸方言に対する波状的な変化の積み重ねとして説明することを試みた。(13)で仮定した祖形からのこれらの変化は以下

のようにまとめられる。 $\alpha$  と  $\gamma$  は両立不可能な変化である。

#### (25) 九州に広がったアクセント改新の波

- α. 低起各類の上昇時機による弁別の喪失 (西南部)
- β. H+ 類の低起化と、境界特徴の獲得 (対馬・筑前・南部)
  - β<sub>1</sub>. H+ が L+ } へ。
  - β<sub>2</sub>. H+ が LH+ } へ。
- γ. L+{ 類・L+H 類の高起化と下げ核の位置によるピッチ・アクセントの獲得 (豊前) = (8) b
- δ. LH+ 類の語頭隆起によるピッチ・アクセントの獲得 (豊前・筑前)

これらの変化の波及した地域を地図化するにはまだ情報の空白域が広すぎるが、一型アクセントを含めて本稿で言及した諸地点は、それぞれ記号の順序でこれらの変化が及んだものとして分類できる。

#### (26) 九州アクセントの分類

豊前式	$\gamma\delta$
対馬主流	$\beta_2$
筑前式	$\beta_1\delta$
九州南部二型	$\alpha\beta_2$
島原二型	$\alpha$
一型 (頂点・境界型)	$\alpha$ 及び型所属の曖昧化: 平戸・上五島
一型 (境界型)	$\alpha\beta_2$ : 熊本・山都・佐賀・ 玄海・五島
一型 (境界非表示型)	$\alpha$ あるいは $\alpha\beta_1$ : 久留米・ 延岡・日南

$\alpha$  は、型の統合に関わるものであるが、九州東北部を除く一型アクセントと二型アクセントの全体に及ぶ。 $\beta$  は、下降境界特徴の分布と型の統合に関わるものであり、さらに、H+ が L+ 化するか LH+ 化するかにより  $\beta_1$  と  $\beta_2$  に下位分類できる。

一型を除くと、 $\beta_1$  地域が筑前式地域と壱岐を中心に、南北 (対馬・中南九州) の  $\beta_2$  地域を分断する分布となる。 $\beta_1$  地域の南に隣接する久留米が境界非表示の一型であれば、下降境界特徴を生まなかった H+ 類と L+{ 類の統合として  $\beta_1$  に関連付けることができるかもしれない。ピッチ・アクセント発生に関わる変化のうち  $\gamma$  は、瀬戸内海に近い地域に限定されるが、 $\delta$  は筑前にまで及んでいたことになる。これらの変化は、本州で起きた変化の地理的拡大である可能性がある。一方、位置対立を引き起こさない語頭隆起である  $\delta$  は、ピッチ・アクセントのない方言にも起こりえた変化である。たとえば、佐賀郡久保泉村のアクセントに出る交代形としての頭高形は、 $\delta$  の結果である可能性もある。

先に述べたように、 $\alpha$  は  $\gamma$  の前提となる上昇時機の対立を失わせるため  $\gamma$  と両立不能であるが、 $\beta$  と  $\gamma$  も両立していない。川上 蓁 (1965a) では (8) b の条件として連低に続く「上昇」の存在を挙げていることを考慮すると、H+ 類の L+{ 類との統合に際しての L+{ 類への付属語接続時の上昇契機 "}" の不在 (消失または未発生) が関わっている可能性がある。このほか、本稿では言及しなかったが、たとえば、歴史的には低起であった付属語がアクセントの独立性をどのように保ったか、あるいは失ったか、 $\beta$  を経たアクセントに多くみられる境界特徴の削除の条件の分布など、ほかにも一型を含む九州のアクセントの分布によりその波状的広がりを検証すべき特徴は多いと思われる。

最後に、冒頭で述べた金田一 (1999) が九州アクセントの祖形が豊前式のピッチ・アクセント (B) だと考えるべきであるとした根拠 I と根拠 II に対し、祖形がピッチ・アクセントでなかったとすればどういう説明できるかをまとめる。根拠 I が問題としている H+ 類の下降については、 $\beta$  による下降境界特徴の獲得で説明できるものがほとんどである。例外は、島原二型の A 型 H(.H)L+ 冒頭の下降で、これについては上野 (2006) の下降式の残存とみなしうる可能性がある<sup>10)</sup>。根拠 II で述べられた、二型諸方言の文節末の「アクセントの滝」と、宮之浦方言 2 音節名詞の助詞への「山

## 九州におけるアクセント変化の再建

の移動」の欠如は、ともに南九州の二型アクセント方言が獲得した下降境界特徴の実現として説明できる。このような境界声調に関する改新の違いはあるものの、二型各アクセントのB型は、京阪式アクセントのⅡ-4類やⅢ-6類と、原平安アクセントの低起の型がアクセント核を獲得していないという保守的な特徴を共有していると考えべきであり、豊前式と共通の改新(γ)があったと考えなければならない理由はない。ただし、二型・京阪式共通の助詞への「山の移動」自体は、「付属語の順接化」に伴うそれぞれの改新である。

本稿では波状的な変化として九州のアクセント変化を再建してきたが、(13)の「九州アクセント祖形」のみは系統分化的な見方をしている。先行研究への代案を提示する、という必要上、現在九州に分布する多様なアクセントの特徴(類型・型の弁別・境界特徴)をすべて説明できるような単一の祖形として、平安アクセントで下降時機に発達する境界特徴%を失った形を考えた。しかし、この点についても見直しが可能である。九州のアクセントが共通して失ったのは、正確には「境界特徴%の有無による型の弁別」であるから、境界特徴%自体を失うことなく弁別を失った方言もありえた可能性がある。「H+類のL+類化・LH+類化」と下降境界特徴の発生の間の関連は、βの因果関係を逆転させて、文節末にどの型も下降境界特徴をもつように変化した方言群でH+類のL+類化・LH+類化が引き起こされた、と解釈することもできよう。この場合は、単一の「九州アクセント祖形」は存在しなかったか、あるいはもっと前の段階まで遡ることになる。二通りの解釈のどちらが正しいかを判断する材料は今はないが、語声調や境界特徴の性質に関するデータの蓄積とよりよい理解が必要なこと、また、アクセント変化が必ずしも系統分化とは捉えられないことを指摘してこの試論を終える。

## 〔付記〕

本稿は平成25年度科学研究費基盤研究(C)(課題番

号2152041100)「韻律ラベリングのデータベース化のための曲線声調表示された韻律階層の日印対照」の研究成果に基づくものである。

## 〔注〕

- 1) 根拠Ⅰへの批判と対案については上野善道(2006)を参照。
- 2) ピッチ・アクセントを音韻語につき1個の指定音節をもつとするDonohue(1997)の類型も参照。
- 3) 最初の3つは上野(2006)のⅢ-1b, Ⅱ-1b, Ⅲ-7b類に語例がある。この例外の説明については下記注6)を参照。
- 4) 川上(2000)においても取り扱われている平安アクセントの曲調に関しては、現代九州諸アクセントとの関係が未詳であるため、表中では括弧に入れた上野(2006)のⅠ-4/5類以外は省く。
- 5) 低起の助詞「も」の声点が「低低型」に接続する場合にのみ下降調(平声軽)で現れることから、川上(1995, 初出1979)は「低」類の後では高起だけでなく低起でも上昇があった可能性を指摘している。そうであれば、この上昇は「低低型」語末の上昇境界声調であると分析できる。ただし、川上(1997)では低トーン類(=「低低型」)の音韻解釈として上昇契機が必要となるのは、高起助詞の順接化以降としている。
- 6) 屋名池(2004)によれば、アクセント上独立しない助動詞シムが動詞に接続した連続は、長さに関わらず(12) i'が適用されない。名詞の複合でも同様に後部要素の長さが(12) iの適用に関与するとすると、(12) iの適用の例外にみえるHJ#をもつ長い名詞、つまり上野(2006)のⅡ-1b, Ⅲ-1b/7b各類も何らかの複合として説明できる可能性がある。なお、屋名池(2004)では、形容詞の二型は連体形を含むすべての活用形で、動詞シム接続形と同様、長さにかかわらずHJ#の語形としている。
- 7) 早田・陣内(1999)表ⅡのA-C。調査語数からみて「兎類」と「小豆類」は逆転していると判断した。
- 8) 平山輝男(1999b, 初出1951)に、壱岐方言での同様な文節形の揺れが報告されている。
- 9) 平山(1999a, 初出1941)は久留米市方言を「平板一型」として、連文節を含む音声の実現変異を簡単に記述している。
- 10) その他の点では、下降式説に対して中立的である。下降式が末尾の境界特徴の有無による弁別が可能な実現形をもつ限り、高トーン(H+)を下降式に変えても問題はない。

## 研究論文 (Research Articles)

## 参考文献

- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1–42.
- 奥村三雄 (1989) 『九州方言の史的研究』桜楓社.
- 奥村三雄 (1999) 「九州諸方言アクセントの系譜」『日本列島方言叢書 23 九州方言考①』195–219, ゆまに書房. (初出: 『九州文化史研究所紀要』28)
- 川上夔 (1965a) 「いわゆる低低低型から高高低型への変化」『音声学会会報』118, 13–16, 11.
- 川上夔 (1965b) 「平安アクセントと補忘記アクセント」『国語国文』366, 63–78.
- 川上夔 (1995) 「京阪語の「も」などのアクセント」『日本語アクセント論集』446–455, 汲古書院. (初出: 『田邊博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社)
- 川上夔 (1997) 「高さアクセントの記述一段, 向き, 契機, 核など」『音声研究』1(2), 20–27.
- 川上夔 (2000) 「日本語アクセントのトーン性」『音声研究』4(3), 28–31.
- 木部暢子 (1988) 「二型アクセントにおける助詞・助動詞のアクセントについて—長崎県加津佐方言—」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』28, 47–62.
- 木部暢子 (2010) 「方言アクセントの誕生」『国語研プロジェクトレビュー』2, 22–35.
- 金田一春彦 (1999) 「対馬 附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」『日本列島方言叢書 25 九州方言考③』103–117, ゆまに書房. (初出: 九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院)
- 児玉望 (2012) 「屋久島の二型アクセント—自発談話音声資料の韻律分析—」『音声研究』16(1), 119–133.
- 添田建治郎 (1996) 『日本語アクセント史の諸問題』武蔵野書院.
- 早田輝洋 (1982) 「博多方言の名詞のアクセント体系」『九大言語学研究室報告』3, 1–18.
- 早田輝洋 (1999) 『音調のタイポロジー』大修館書店.
- 早田輝洋・陣内正敬 (1999) 「博多方言名詞アクセントの年代差」『日本列島方言叢書 23 九州方言考②』51–61, ゆまに書房. (初出: 『文学研究』31)
- 平山輝男 (1999a) 「九州東北部のアクセントとその系統」『日本列島方言叢書 23 九州方言考①』150–194, ゆまに書房. (初出: 『国学院雑誌』47 (1) および (2))
- 平山輝男 (1999b) 「壱岐対馬両方言の音調に就いて」『日本列島方言叢書 25 九州方言考③』87–102, ゆまに書房. (初出: 『音声の研究』7)
- 屋名池誠 (2004) 「平安時代京都方言のアクセント活用」『音声研究』8(2), 46–57.
- 日本放送協会編 (1999) 『CD-ROM 版 全国方言資料 全十二巻』(ハイブリッド版)
- Donohue, Mark (1997) “Tone Systems in New Guinea.” *Linguistic Typology* 1, 347–386.

(Received Jul. 27, 2012, Accepted Nov. 25, 2014)